

■ *Please read the notes below before reading this book.*

- ・創作人物、創作スタンドが登場しますのでご注意ください。
- ・三部後、花京院が承太郎と復学している設定となっております。
- ・本書では1988年～1989年説を採用しております。
- ・一部、流血・暴力表現等残酷描写がございます。ご注意下さい。
- ・本書は実在する組織、個人等とは一切関係ございません。
- ・登場人物の過去を捏造しております。ご注意ください。

「聖なるかな
聖なるかな
聖なるかな
主、全能者なる神
かつて在し、現在も在し、
またこれからも来る者」

(ヨハネの黙示録 22:8)

0

『……さて次のニュースに参ります。先月六日から相次いで起こっている連続怪文書事件ですが、今度は××区の路地裏にて発見されました。

手口はこれまでと同じく、文具店で多数売られている半紙を用い、同じ筆跡で同じ文章が書き出されていました。

その数、なんと百六十三枚に及び、これまで起きた分を合わせると、五百五十八枚に達しました。

半紙に書かれた文字は——【禍】わざわい 18:10。

専門家によるとこれはおそらく「ヨハネの黙示録」に基づいて記述されていると思われ……』

街には十二月の冷たく、どこか忙しない空気が漂っていた。

電気店のショーウィンドウに鎮座しているブラウン管テレビから夕方のニュースが流れる。ここ最近世間を賑わせている怪文書事件に関する報道だ。それを前に立ち止まるサラリーマンや、横目に過ぎ去る学生たちの中で、とある若者の一団が賑わいを見せ始める夕刻の繁華街をうろついていた。自転車を引きついていた学生がその若者たちと目を合わせないように、足早に過ぎ去る。

「ケンジィ、どつかにイイカモいねえかなア」

フツ、と若者の一人が煙草をふかしながらケンジと呼んだ青年へ声をかける。ケンジは三白眼の腫でじろりと辺りを見渡し、カモを見つけようとする。そこでふと、いかにも気弱そうな分厚い眼鏡をかけた詰襟制服の男子学生に目を留めた。

手には文庫本を持って黒髪を長く伸ばしている。細つこい上に肌も白い。いかにも弱そうな奴だ。

ちよつと脅せば今日の飲み代の足しにはなるかもしれない。ケンジはそう判断して他の仲間へと目配せする。ニヤリ、と厭らしい笑みを互いに浮かべてケンジは上着のポケットに手を突っ込むと、黒い詰襟の男子高生へ向かつて歩き出した。

「ちよつとキミィ、ツラ貸してくんねえかなア？」

そう言つてケンジたちは男子学生を取り囲む。

学生がどこにも逃げられないよう囲い込みながら、さりげなく人目のない路地裏へと誘導していく。

男子学生は怯えているのか、無抵抗のままケンジたちに従つて明かりの少ない路地裏の先——高架下まで移動する。調子に乗つたケンジは男子学生の胸ぐらを掴むと、壁へと押し付けた。

「なア、オレたちに恵んでくれねーかア？　ちよ

つとだけで良いんだよ。な？」

やさしい声色とは裏腹に、睨みを利かせてケンジは男子学生へと金をせびる。

ガタン、ガタン、と上を走る電車の音が喧しい。ケンジを含む若者たちは下卑た笑いを浮かべて、男子学生の反応を待った。

ふとその時——何事か、その男子学生の色素の薄い唇が動いた。

「アア？　なんだア？」

電車の音で聞き取れず、ケンジが耳を寄せる。

——刹那。

спан、とケンジの耳が弾け飛んだ。

下から垂直に切り裂かれた耳は宙を舞い、びたんという音を立ててアスファルトに落ちた。

数秒遅れて、鮮血がびしやりと垂れ流され、ケンジの顔や大地を汚していく。

「エ？　は、な、なんだ、い、痛い、痛え！　痛エよオオオオ~~~~！！！」

ケンジは慌てて手を放し、学生から離れた。胸ぐらを掴まれていた男子学生は地面へと降り立つ。ケンジの仲間たちは目の前で起こったことがさっぱり分からずにいた。ただ、眼鏡の奥で冷たく見据える男子学生の視線と、切断されたケンジの片耳とに、頭の中で赤い警鐘が鳴り響いた。

その腹の底からこみ上げてきた、得体の知れぬ恐怖を掻き消そうと、ケンジの仲間たちが男子学生へと一斉に襲い掛かった。

だが、その攻撃が届くことはなかった。

凄まじい風圧と高い音が若者たちに襲い掛かる。かと思えば、身を裂く痛みが若者たちの身体を風

と共に吹き抜けていった。一瞬だった。

鮮血が飛び散り、吹き荒んだ鎌鼬（かまいたち）

に刻まれた若者たちが肉塊へと変わっていく。

パッ、と暗い宙に赤い華が咲き、ぼとぼと質量をもった肉と臓腑の雨が地に降り注いだ。

「ヒッ……ッ!!」

片耳を切り落とされたケンジが、仲間だった残骸を見て顔を引きつらせる。耳を無くして血を垂れ流す洞穴を押さえ、ケンジは恐怖で震える足でその場から引き下がろうとした。

けれど、一歩後ろに踏み出したその足首は——スッパリと切れた。目に見えない風のナイフで切られたように、足首が切り取られ、ケンジの体勢がガクリと傾く。

一瞬のことで何が起ったのか分からないまま、ケンジの体はそのまま薄汚れた地面へと倒れた。

その視線の先に——ぎ、と。男子学生の革靴の先が見えた。

ケンジは必死に視線を上方へと動かし、男子学生を見ようとする。だが、その側頭部をがんと思い切り踏みつけられ、ぐえ、とケンジは痛みと圧迫感に呻いた。

なんで自分がこんな目に、と。地面と靴裏に圧迫されたケンジは脳裡で思う。切り落とされた耳の切断面が、ごつごつした冷たいアスファルトに当たって酷く痛かった。

「た、たす、けて……くれ……ッッ」

ケンジは必死に命乞いをする。

数秒の間が落ちた。

すつと、ケンジの側頭部を圧迫していた足が退いた。淡い安堵の色がじわりとケンジの心に広がっていく。慌てて身を起こそうとした。

だが、それは叶わなかった。

びゅうと風が巻き起こったかと思えば、手足が無くなっていた。付け根から綺麗に分断され、達磨のようになったケンジの身体は、情けなくまた地に落ちると、鮮血を撒き散らしながら転がった。

ケンジが激痛に絶叫を上げようとした――が、

その時には、その顔面さえも切り刻まれて小さな肉塊へと変わり果てていた。辺りに脳漿が飛び散り、ピンク色の肉が赤い血でぬらりと濡れて、薄暗い高架下に頭蓋や脳の欠片が転がる。

静寂が訪れた。

黒い制服を纏った男子学生は小さくため息を吐くと、その場を後にしようとした。不意にその背中に、低く落ち着いた男の声がかかった。

「キリシマ」

名前を呼ばれたキリシマという男子学生がちら

と振り返れば、全身黒づくめの男がそこにいた。

背丈は高く、風にゆるりと黒衣が揺らぐ。目深に被った帽子で表情は見えない。足が悪いのか杖について男子学生に近寄ると、その白濁とした瞳が凄惨な殺人現場へと向けられた。

「……殺したのか」

「……ええ、まあ」

男子学生——キリシマが重たげな眼鏡を上げて素っ気なく言う。その答えに対して黒衣の男もまた、そうか、と短く答え返した。キリシマは「それより」と黒衣の男へと口を開く。

「【結界】はもう仕上がるんですか？ フドウ」

問いに対し、フドウと呼ばれた黒衣の男は頷く。

「ああ。じき、時は来る」

「そうですか」

僕達の時代がくるんですね、と抑揚のない声で

男子学生が紡ぐ。師走の冷たい風がびゅうと吹き、高架線上を電車が騒がしく駆け抜けていく。

それから黒衣の男と男子学生は、それぞれ夕闇に溶けるようにして消えていった。

後に、「禍」という名の凶兆だけを残して。

電車の高架下には、「禍」と記された無数の文書が風に揺れていた。

1

1989年12月24日。

エジプトでの激闘を終え、仲間たちは皆、無事に生還を果たした。それぞれの非日常はまた、それぞれの日常へと帰っていた。留年した承太郎の日常もまた元の学生生活へと戻り、今日も気だるい終業式を終えたところだった。

冬休みを前に浮き足立った教室を後に、承太郎は真っ先に戦友であり想い人である——花京院のクラスへと向かった。窓からは太陽の日差しが差し込んでおり、冬晴れの青空が広がっている。去年は違う異国の空を見ていたのだと思うと奇妙な感じであった。

花京院はあの旅の後に負った怪我の影響により、承太郎と同じく進級できず二年生をやり直していた。とはいっても成績には問題ない花京院なので、身体の調子も戻り始めた今なら、今後の学生生活にも特に問題はなさそうだった。

承太郎は慣れた足取りで花京院の教室まで来ると、案の定、わあっと女子生徒の黄色い悲鳴が上がった。これには毎回辟易されるが、やわらかな赤毛に緑の長ランの青年を見つければ、すぐにその心も晴れた。

「花京院」

その名前を呼べば、丁度帰り支度ができた花京院が振り返り、視線がかち合った。

「承太郎」

花京院は承太郎を見つけると——その顔にふわりと柔らかな微笑を浮かべ、鞆を手に駆け寄って

くる。復学してから何度も見てきた姿だが、何度見ても承太郎は「花京院がいる」という事実を実感する度にたまらない気持ちになつていた。

そんな気持ちを今日もひた隠しながら、承太郎は花京院へと小さな笑みを返す。

「おう」

「わざわざ来てもらつてすまないな。ありがとう。帰りましょうか」

女子に絡まれないうちに、と。花京院が承太郎へと耳打ちする。すると花京院と同じクラスの女子生徒たちが名残惜しそうに視線を送ってくるのがわかった。どうやら花京院へと好意を寄せている女子も少なくはないようだ。承太郎は内心それを憂慮しつつ、花京院と共に教室を出た。

不意に隣を歩く花京院がご機嫌良さに笑ったのを見て、承太郎が視線だけで問う。その視線に

氣付いた花京院が、ああいやね、と誤魔化すように口を開いた。

「今日、楽しみだなあと思つて」

みんなに会えるだろう?、と花京院が答える。

その答えに承太郎も目もとをふつと和らげた。

「……ああ。そうだな」

応えながら頭の中に仲間たちの姿を思い浮かべる。たつた五十日を共にした仲間である筈なのに、いつの間にか強い絆で結ばれた、かけがえのない存在になつていた。その面々を思い出すと、急にこの学校生活が夢のようで、あの激闘のほうが現実のように思えてくるほどだった。

——本当に夢のような、日々だった。

承太郎はこの安穩とした学生生活を、少しでも花京院と共にできて良かったと思う。

同時にあの旅があつたことに、そして花京院と

出会えたことに感謝した。

その仲間たちと共に再び、降りかかってきた禍いと戦う事になるのは——皮肉なことだった。

校内には学生たちの賑やかな声が響き、平和に浸つた生徒たちの姿が見える。その中を歩きながら承太郎の頭に掠めるのは、最近世間を賑わせる怪事件のことだった。

それはまるで穏やかな日差しが差し込んだ中に生まれた、仄暗い、影のようだった。